

## たじみん昼話 17

### 所謂1つの、本読みが嫌いな人の読解力入手法

国語の問題には解き方があり、ある種のテクニックがあれば解答できてしまうこともあるが、多読している生徒は国語が得意な場合が多い。しかしこの多読には、不得意な人にとっては、畏が潜んでいることをご存じだろうか。

実は、多読により国語を得意にしている人は、大変な本好きが多いのだ。活字に抵抗感がなく自ら積極的に読書をしているので、理解度が高く、内容もしっかり身につけている。それに対して、本も国語も嫌いな人の読書は、字面だけ無理矢理読んでいる場合が多い。所謂やらされ読書で、読めば読むほどだめになる作業読書になっている場合が多く、読解力が身につくにはほど遠い。

そこで、国語が不得意な生徒が読解力を付けるための、多治高生にお勧めの読書法（過去成功）を3つ紹介する。

- ①1冊の本を隅々まで神経を使って3回以上読む。隅々まで神経を使って読むことを繰り返す。
- ②本に書いてあることを評論する。評論とは、自分だったらどう考えるか、どう行動するのかを、自分自身に問いかけて考えることだ。そして、「この文は要するに何が言いたいの」「自分に当てはめると何」等を、深く考えて読むところまでを実行することをお勧めする。
- ③本当の精読をする。本に線を引いたり付箋を貼ったりすることで、深く読んだ気になっていないだろうか。真の精読とは、多くの情報に目を向けず、書いてあることを3つに絞って理解し、理解したことを行動に移すことである。線を引いたところや付箋を貼った所の中で、やりたいことを3つ行動に移したり考えたりすることに挑戦して欲しい。

読書嫌いの人こそ、時間制限ではなく内容を重視したページ制限を設けた読書をおすすめする。後は、実行あるのみだ。